

□2月25日説教(隅野瞳牧師)短縮版
「主の御手がわたしを囲む」列王記下6:8～23

エリシャによって自軍の動きが筒抜けになっていると知ったアラムの王は、夜のうちに彼のいる町を大群で包囲しました。エリシャの従者が翌朝外に出てみると、アラム軍に包囲されているのを知ってパニックになりました。しかしエリシャが従者の心の目が開かれるように祈ると、神の守りである火の馬と戦車がエリシャを囲み、山に満ちているのが見えました。

十字架につけられたキリストこそ真の救い主であり、そこにこそ神の愛が満ちあふれ、罪人である私も救われる。そう信じることができるのは、御言葉を通して聖霊がお示しくださるからです。私たちの目の前に主はおられます。日々の見える出来事の背後には、全能の愛の主が共にいまし、御手がすでに私たちを囲んでいます。それを私たちが見いだせるかどうかだけなのです。

エリシャが祈るとアラム軍の目は見えなくなり、目が開かれると彼らは敵陣の真ただ中であるサマリアに連れて行かれたとわかりました。イスラエルの王は彼らを打ち殺しましめようかと尋ねますが、エリシャは捕虜たちを解放し、食事を与えて主君のもとに帰すよう勧めます。御手がエリシャを囲んだのは、平和と救いの主が御自身をお示しになるためでした。自分に敵対する相手に祝福をもって臨んでも、相手の態度が変わらないことがほとんどでしょう。けれども私たちは、主にあってあえて「赦し愛すること」を選ぶ者とされます。なぜなら神が私たちに限りない忍耐をもって、そうしてくださったからです。

祈る時に私たちは自分の力を手放し、主と隣人に心を開きます。悔い改め、愛と希望に満たされて道を見出します。祈りによって主の働きが成し遂げられた時、私たちは喜びの中でまったく主に栄光を帰すでしょう。私の霊の目を開いてくださいと祈るとともに、すべての人の救いと祝福のために、為政者や主の御用に仕える方々のために祈ってください。主は十字架への道を、絶えざる祈りによって歩み抜かれました。私たちが祈ることについて父のもとから離れているなら、ここを立って父のもとに行こうと今日決意しましょう。(終)